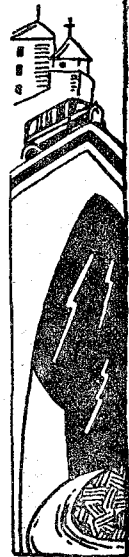




## 漫 録



# 我は我たる驛名と彼は彼たる橋名

公 木 生

停車場の驛名や、あらゆる橋梁の橋名は、一般公衆に知らしむる爲の標識である以上は、一見判り易きやうに工夫することが第一義であらう。

嘗て省線の驛名に誤記濫用の假名字を以て標示せられたのが、眼に餘つたので大に物議を生じ、終には帝國議會で一部の貴族院議員が躍起と爲り、小學兒童に對して教授する假名遣ひの趣旨を破壊するの暴舉であるときまで論難するに至り、時の鐵道大臣小川平吉氏は、此の攻撃の鋭鋒に僻易し、早速之を書き改めたことがある、東京市内に於ける

中央線の驛名に就きて、例へば「すい<sup>。</sup>どうばし」を「す<sup>。</sup>らうばし」に又「おちやのみず」を「おちやのみづ<sup>。</sup>」に訂正したのはこの時である。此の時代に又驛名の標示の漢字及假名字は、右書きが宜いか、左書きがよいかといふ問題も起り、ローマ字と並列する關係などを云爲して、極力左書きを主張する論者も出で、此れにも可なりの議論があつたが、流石は小川鐵相、斷然右書きに一定したる故、今日に在りては省線到る處として驛名の右書きならざるはないので、如何にも能く統一せられて居るのは、一種の快感を

覺ゆるのである。然るに試に會社線に乗り出して見ると、何の事だ恰も我は我たり、汝は汝たり、我何ぞ省線の例に做ふを要せんや、と言はぬばかりに、今尙ほ左書きを標榜して居るのがある。それが省線を一步出づる處に在るのであるから、實に目立つのである。西武鐵道川越線の高田馬場驛を發車すると、次の下落合（しもおちあひ）これは少々曖昧であるが、其の次の中井（なかい）以西の各驛を見ると直ぐ合點が行くであらう。ローマ字を縦書きにして居る商店の看板も往々見受ける現代の事なれば餘り神經を尖らすにも及ぶまいと云へばそれまでである。

次に東京市内に於ける橋名の標示に至つては、區々として統一されて居らぬのは呆れざるを得ない。地方より上京する人士殊に、縣廳市役所などの當局者が管内の橋名標示の模範を求めんとする場合には一寸迷ふことであらう。

先づ帝都の中央に位する所謂江戶日本橋を見よ橋の中央部には麗々と東京市道路元標と標示してあり、寧ろ全國道路の元標である所の日本橋は前面（北）より向つて左側に

は橋名を漢字に、右側には架設竣功の年月（明治四十四年三月成）を標示し後面（南）より向つて左側には橋名を假名字に右側には架設竣功の年月を標示してある。其の上流の西河岸橋と其の次の一石橋は、何れも前後左右に橋名を向て右に漢字左に假名字で標示し、下流の江戸橋は、前後左右共に漢字のみで標示してある。其の直ぐ近くの親父橋は前後兩面共に向つて右側に漢字で橋名を左側には架設竣功の年月を標示し、殊に奇怪の事には之と正反對に神田橋は前後兩面共同つて左側に漢字で橋名を右側には架設竣功の年月を標示してある。其の隣の錦橋は前後兩面共右側に漢字左側に假名字で橋名を示してあるから、夫の西河岸橋又は一石橋と同種に屬するものなるが、唯一石橋は勾欄の石柱に橋名を彫刻しあるも錦橋は石柱に橋名匾を挿入するの相異がある。此の種の方法に従ふものに江戸川に架設せる江戸川橋より下流船河原橋に至る約十ヶ橋がある。而して此の船河原橋に接近する飯田橋は前後左右共に橋名を漢字の横書きで標示し、此の種のものには九段下の俎橋を始

め鎌倉橋、新常盤橋、常盤橋等がある。尙ほ此の外にも昭  
和道の蓬萊橋、新京橋、江戸橋（前掲）及和泉橋がある。  
これらの架橋工事は皆復興局の施行したるものであるとの  
こと故更に復興局關係の隅田川に架設せる相生橋、永代橋、  
清洲橋、藏前橋、駒形橋及言問橋の六大橋を見たるに、何  
れも此の前後左右共に漢字標示の橋名である。復興局が従  
前の假名字を排斥して漢字のみに改めたのは自ら恃む所あ  
つて新機軸を出したのであらうが、さり逆同一市内に於て

も東京市自身の施行するものには此の方法が普く及んで居  
らぬのは何のことだ。固より復興局の執法を是とし之に倣  
へといふのではないが、適當のものに統一することは望ま  
しく思ふのである。尙ほ復興局の施行したる百十幾つかの  
橋梁には、橋の側面に橋名の標示があるが、これは航行者  
の利便の爲に適切なる標識と思ふ、東京市の施行したる御  
茶ノ水橋の橋側にも橋名を標示したのは彼に模倣したので  
ある歟。

## 良二千石會議の遙望

咲いたと思つた櫻はもはや散つて残んの花の打ちしほれ  
た姿が窓外にちらつく此頃、年中行事の地方官會議が開か  
れた。良二千石との通り名で思ひ起すのは、君を撰ぼか二  
千石取るか何んの二千石君と〇よと云ふ情熱的な地方長官

は果して幾人かある。蓋し一人もあるまい只の一人もあ  
るなしではなからうか。昔日の中井櫻州や服部一三氏や大  
森鐘一翁やまつた森正隆氏などの事を思ふと時代の變りは  
甚だしいものだと馬の足生がかこつても無理ならぬことであ

夏 木 圓 卓